

グリーンインパクト評価ガイド（仮称）

本文案

ESG 金融ハイレベル・パネル

ポジティブインパクトファイナンスタスクフォース

2021年1月〇日

目次

ポジティブインパクトファイナンスタスクフォース 委員等名簿.....	2
1. はじめに	3
(1) 本ガイドの目的	3
(2) 本ガイドの構成、対象範囲	4
2. インパクト評価の手順	6
(1) コア・インパクト領域の特定	6
(2) コア・インパクトの評価	13
(3) 評価結果の確認・分類	18
(4) インパクトの管理体制の構築	21
3. 独立した評価を行う場合	22
(1) 独立評価が望ましい場合	22
(2) 評価機関	22
(3) 評価すべきポイント（特定したインパクトの事前評価結果、モニタリング結果）	22
(4) 評価結果の開示の範囲	23
－ 付属資料 －	24
I. 「インパクトファイナンスの基本的考え方」（2020年7月取りまとめ）	24
II. ポジティブインパクトの発現に伴う重大なネガティブインパクトの例.....	25
III. インパクト領域ごとの評価指標の例	31
IV. インパクトの算定方法の例	35
V. インパクトファイナンス事例集	37
VI. 代表的なツール類の使い方	38
免責事項	49

ポジティブインパクトファイナンスタスクフォース 委員等名簿

<委員>

- 安間 匡明 一般財団法人 社会変革推進財団 エグゼクティブアドバイザー
- 江夏 あかね 株式会社野村資本市場研究所 野村サステナビリティ研究センター長
- 梶原 敦子 株式会社日本格付研究所 サステナブル・ファイナンス評価部長
- 金井 司 三井住友トラスト・ホールディングス株式会社 フェロー役員
兼 チーフ・サステナビリティ・オフィサー
- 木保 公美 アクサ・インベストメント・マネージャーズ株式会社
営業部 ディレクター
- 竹内 直人 第一生命保険株式会社 総合審査部長
- 竹田 達哉 株式会社三井住友フィナンシャルグループ 企画部
サステナビリティ推進室長
- 徳田 展子 一般社団法人 日本投資顧問業協会 ESG 室長
- 八矢 舞子 株式会社日本政策投資銀行 サステナビリティ企画部 課長
- 林 寿和 ニッセイアセットマネジメント株式会社 運用企画部 ESG 推進室
チーフ・アナリスト
- ◎水口 剛 高崎経済大学 副学長、経済学部教授

(五十音順・敬称略、◎座長)

<オブザーバー>

国連環境計画金融イニシアティブ (UNEP FI)

国際金融公社 (IFC)

内閣府

経済産業省

国土交通省

金融庁

<事務局>

環境省

CSR デザイン環境投資顧問株式会社

1. はじめに

- 本評価ガイドは、「基本的考え方」を踏まえ、未だ方法論の試行錯誤が続くインパクト評価について、国際的なイニシアティブ等を参考として一定の考え方やルールを整理することで、インパクトファイナンスの主流化を目指すものである。
- 本ガイドは、インパクトファイナンスに取り組む金融機関・機関投資家にとって参考となるのみならず、投融資の受け手となる企業にとっても自らの中長期的な企業価値向上に資するものとなることを目指す。

(1) 本ガイドの目的

本ガイドは、「インパクトファイナンスの基本的考え方」(2020年7月15日ポジティブインパクトファイナンスタスクフォース取りまとめ。以下「基本的考え方」という。)を踏まえ、インパクトファイナンスの普及に向けたロードマップの第一段階として、まずはインパクトファイナンスを実践しようとする大手金融機関・機関投資家を中心に、既にインパクトファイナンスの取組を開始している一部の地域金融機関等も含め、インパクト評価(インパクトの特定、事前評価等のプロセス)の取組に資することを目的として作成するものである。

インパクトファイナンスは、既に多くの金融機関・機関投資家等によって取組が進められており、特に大手と言われる金融機関等においては、融資先との対話がインパクト評価を元として開始されているような例も存在する。一方で、その方法論については、未だに試行錯誤の中にある。

加えて、そうした既にインパクトファイナンスに取り組んでいる金融機関・機関投資家の中でも、通常の投融資の中で、インパクト評価が非財務情報評価のいわゆる「第三軸」の中に組み込まれているところまでは至っていない。

こうした状況の元、本評価ガイドでは、「基本的考え方」の目的であるインパクトファイナンスの主流化を進めるため、まずはインパクトファイナンスに取り組む上で必ず必要となるインパクト評価について、国際的な様々なイニシアティブによって示されている考え方やツールを元に、場合に分けてインパクト評価の具体的な手順を示すことを目的とした。

ただし、本評価ガイドでは、必ずしも評価手法を一つに定式化することや、評価結果のみを自動的に得られるような仕組みを構築することを目的としていない。なぜなら、本評価ガイドの中でも触れるように、インパクト評価は金融機関・機関投資家側からの一方的な取組ではなく、ファイナンスにおいて意図したインパクトの実現の観点から、投融資先の企業による取組を促進することが必要となるためである。

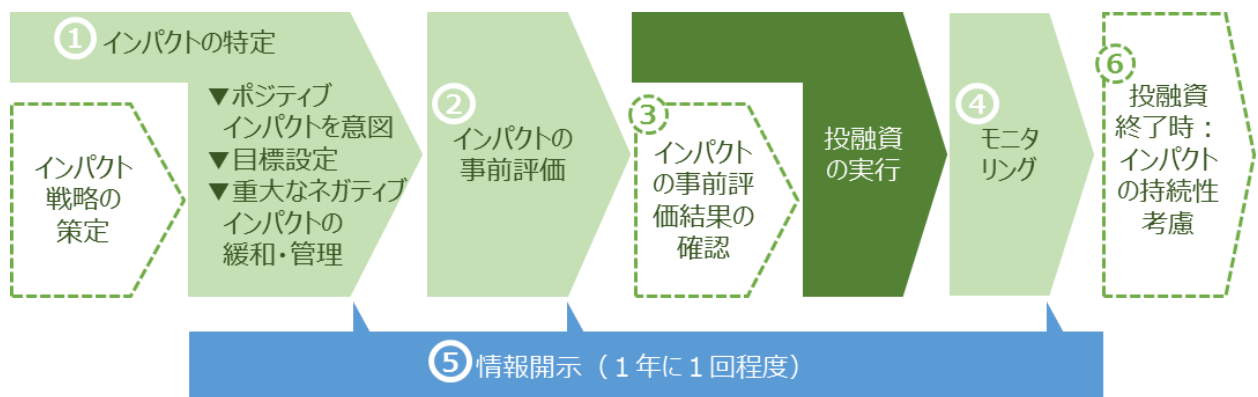
そうした観点からは、本ガイドが、投融資を行う金融機関・機関投資家側にとってインパクトファイナンス実践に当たっての参考となるのみならず、投融資の受け手となる企業にとっても、自らの中長期的な企業価値向上に向けたステークホルダーとの対話に当たって、事業評価や情報開示を行うための参考となることを期待している。

(2) 本ガイドの構成、対象範囲

「基本的考え方」では、個別の投融資におけるインパクトファイナンスの基本的流れ（図1）を示すとともに、投融資を実施する金融機関・機関投資家がポジティブなインパクトを生み出す意図を持つことが前提となること、重大なネガティブインパクトを適切に緩和・管理していく必要があること、当該投融資によって生み出されるインパクトの追加性も考慮することが望ましいこと等を含むインパクトファイナンスの全体像を示した。

本ガイドでは、「基本的考え方」を踏まえ、特に環境（グリーン）の側面に係るインパクトに焦点を当て、インパクトファイナンスの基本的流れのうち、①インパクトの特定、②インパクトの事前評価、③インパクトの事前評価結果の確認、④モニタリング、⑤情報開示の各段階において行われるインパクトの特定・評価に係る具体的な手順を解説する¹。

【図1 インパクトファイナンスの基本的流れ】



（出所：「インパクトファイナンスの基本的考え方」 参考資料）

「2. インパクト評価の方法」では、「基本的考え方」の基礎ともなった各国際イニシアティブにおける考え方を整理しつつ、実際にインパクト評価に取り組む際の各手順の活用方法を解説する。インパクト評価については、UNEP FI や IMP といった、国際的な各イニシアティブにおいて考え方やツールが示されている。本評価ガイドでは、投融資手法ごとに適切なツールを選択し活用できるよう、各イニシアティブにより示されている既存のツールがそれぞれどのような特徴を持つものであり、評価プロセスの各段階で具体的にどのようにそれぞれのツールが使えるのか等について解説する。

「3. 独立した評価を行う場合」では、外部機関による第三者評価又は内部の独立機関による評価を行うことが望ましい場合及びその手法について説明する。

加えて、付属資料として、国内外の先行取組事例や、実際のインパクト評価で用いる

¹ ただし、グリーンとソーシャルの双方を資金用途に含むサステナビリティ・ボンド等と同様に、環境以外の側面にもまたがるものを対象として含み得る。

ツール、指標の例を示す。ガイド本体と併せ参考としていただきたい。

なお、インパクトファイナンスの定義や要件、全体像については、附属資料 I 【P】「インパクトファイナンスの基本的考え方」を参照いただきたい。

2. インパクト評価の手順

インパクトファイナンスは、様々なアセットクラスにおいて、多様な投融資スキームの形をとって発展してきた。例えば、投資家自身にとってマテリアリティ（重要度）の高い領域におけるポジティブなインパクトの創出を目的として戦略を立て、ファンドを設立して、その目的、戦略に合う複数の企業・プロジェクトに投資を行う場合がある（インパクト特定型の一例）。また、コーポレート・ファイナンスにおいては、融資先企業のネガティブインパクト発現のリスクを低減するとともに、ポジティブインパクトの発現を支援するため、融資先企業の及ぼしうるインパクトを包括的に評価して KPI を設定することで、企業の行動変容を促す場合もある（インパクト包括型の一例）。両者において、ポジティブインパクトを創出しネガティブインパクトを緩和・管理しようとする基本は同じだが、インパクト評価に求められる視点や効果的な手法は異なる部分があり、適切な方法を選択して評価を行うことが肝要である。

下記では、インパクト評価について、コア・インパクト領域の特定、評価、評価結果の確認・分類、インパクト管理体制の構築の各段階に分けて手順を示していく。特に、コア・インパクト領域の特定に関しては、「基本的考え方」において定義した「インパクト包括型」及び「インパクト特定型」のそれぞれの投融資のタイプに応じて、活用可能なツール等を解説する。

(1) コア・インパクト領域の特定

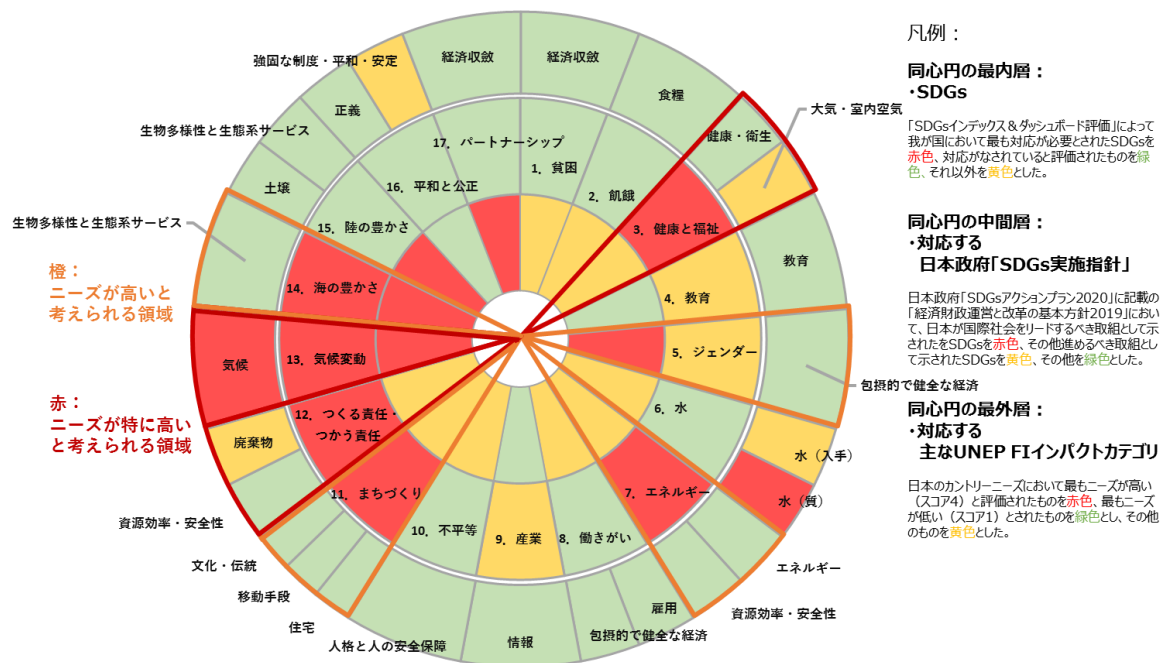
- 相対のコーポレート・ファイナンスのように、特定の融資先企業によるネガティブインパクトの緩和やポジティブインパクトの最大化を狙う「インパクト包括型」の場合は、当該企業が関わる多様なインパクト領域を包括的に分析する UNEP FI のポジティブインパクト金融原則の考え方を活用できる。
- 一方で、テーマ型投資のように特定の事業領域や社会課題におけるポジティブインパクトの発現を狙って投融資を行う「インパクト特定型」の場合は、個々のインパクトを5つの側面から掘り下げる IMP の考え方を活用することができる。

インパクト評価に当たっては、まず、アセットクラスにかかわらず、投融資によって生み出そうとするポジティブインパクトと、緩和・管理すべき重大なネガティブインパクトを明確化するため、特に重大と考えられるコア・インパクトの領域を特定する必要がある。

インパクト領域の分類は、SDGs の 17 のゴールや、SDGs を元に UNEP FI が策定したインパクト・レーダーの 22 のインパクト・カテゴリー（図 3）を基礎として捉えることが有効である。また、日本国内の事業におけるコア・インパクトを検討するに当たっては、「基本的考え方」で示した日本国内の事業におけるインパクトニーズマップ（図 2）を参考とすることができる。例えば、22 のインパクト・カテゴリーのうち、「気候」、「廃棄物」及び「大気・室内空気」は、上記のインパクト・カテゴリーや SDGs アクションプ

ラン 2020 において、我が国におけるインパクトニーズが特に高い領域とされている。

【図2 日本国内の事業におけるインパクトニーズマップ】



一方で、コア・インパクトの特定の考え方としては、「基本的考え方」でも示したとおり、企業の多様なインパクトを包括的に把握し分析する場合と、特定のポジティブインパクトを狙いに行く場合が考えられる。これらは排他的なものではないが、投融资案件の性質に応じて、よりふさわしい手法を採ることも有効である。以下では、前者を「インパクト包括型」、後者を「インパクト特定型」として、それぞれの類型におけるインパクト特定について説明する。

A) インパクト包括型（コーポレート、上場株式等）

企業向けの用途制限のない銀行ローン等のコーポレート・ファイナンスや、市場全体の幅広い銘柄への投資を前提とする上場株式投資等がこれに相当する。「基本的考え方」においては、ポジティブ、ネガティブの両面で、まずは国・地域や事業セクターに基づいて重大なインパクトが発生しうる領域を特定し、その上で、個社の事業や製品・サービスの特性にしたがって投融資案件の具体的なインパクトを特定するとした。

複数の事業を行う事業者の場合は、単に様々な事業から発生し得るインパクトを検討するだけでなく、環境面で重要な（マテリアリティが高い）事業分野を特定し、当該分野から生じるインパクトに重きを置いて検討することが期待される。特にポジティブなコア・インパクトについては、企業の主要な事業から生じるものであることが望ましい。

例えば、多くの化石燃料を使用する事業を主要な事業とする企業の行う再生可能エネルギー発電プロジェクトについて投融資を行う場合、主要な事業からもたらされるネガティブなコア・インパクトとしての気候変動の進行が、再生可能エネルギー発電プロジェクト自体のポジティブなコア・インパクトである気候変動の緩和を大きく上回ることも考えられる。このような場合、主要な事業がもたらすネガティブインパクトを無視して当該企業のインパクトを評価することはできない。

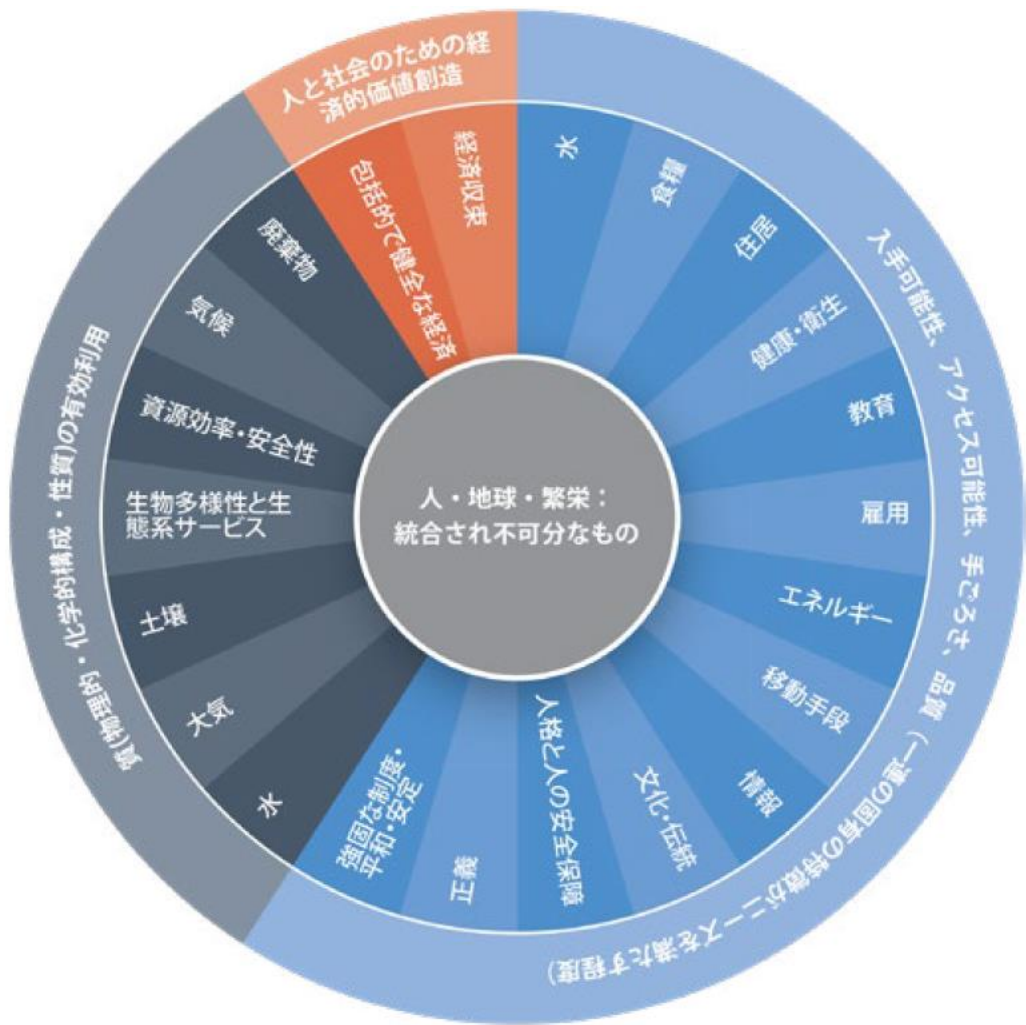
特にグローバル企業においては、エンゲージメント等を通じた多面的な分析により企業自身のコア・インパクト領域についての理解を深めることが有効である。インパクトの「見える化」を通じ、ステークホルダーからの高い評価の獲得と信頼関係の強化が期待でき、企業自身のサステナビリティ経営の強化やインパクトニーズの大きな成長分野におけるビジネス機会の獲得を通じた企業価値の向上が期待される。

インパクト包括型の場合は、UNEP FI が提供する分析ツールであるインパクト・レーダー²を活用することが有効である。UNEP FI のポジティブインパクト金融原則においては、インパクトの包括的かつ総体的な考慮を重視しており、インパクト・レーダーは、SDGs 全般にわたり総体的なインパクト分析を行うためのツールである。

インパクト・レーダーの活用にあたっては、22 のインパクト・カテゴリーを包括的に考慮し、各カテゴリーについてポジティブインパクト及びネガティブインパクトを検討することが望ましい。

² https://www.unepfi.org/wordpress/wp-content/uploads/2018/12/PI-Impact-Radar_J.pdf

【図3 インパクト・レーダー】

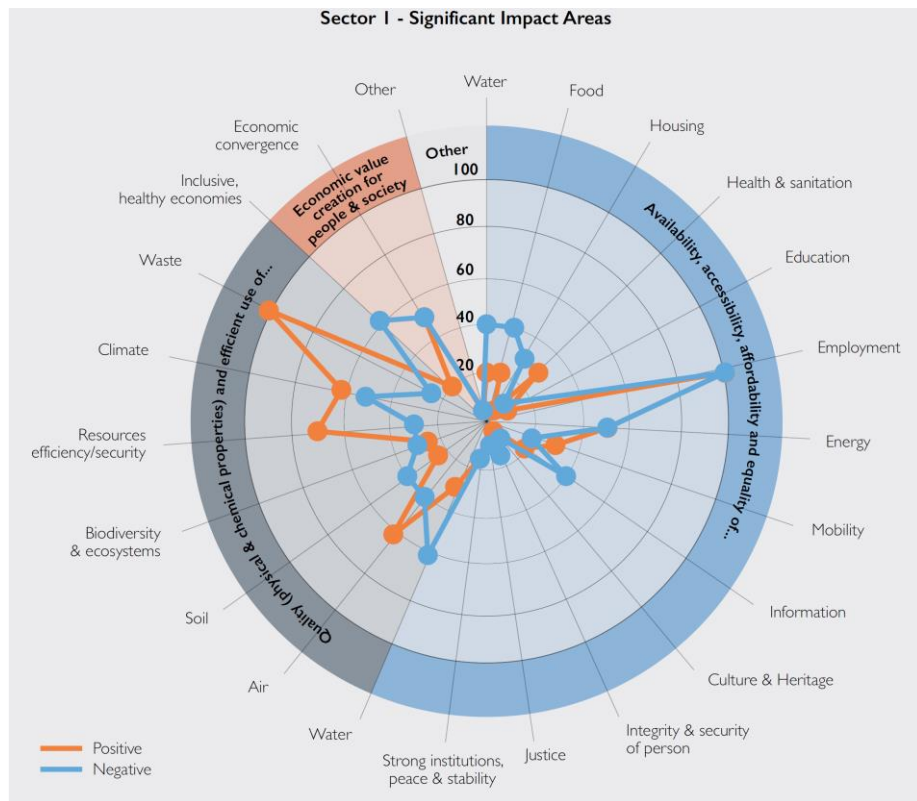
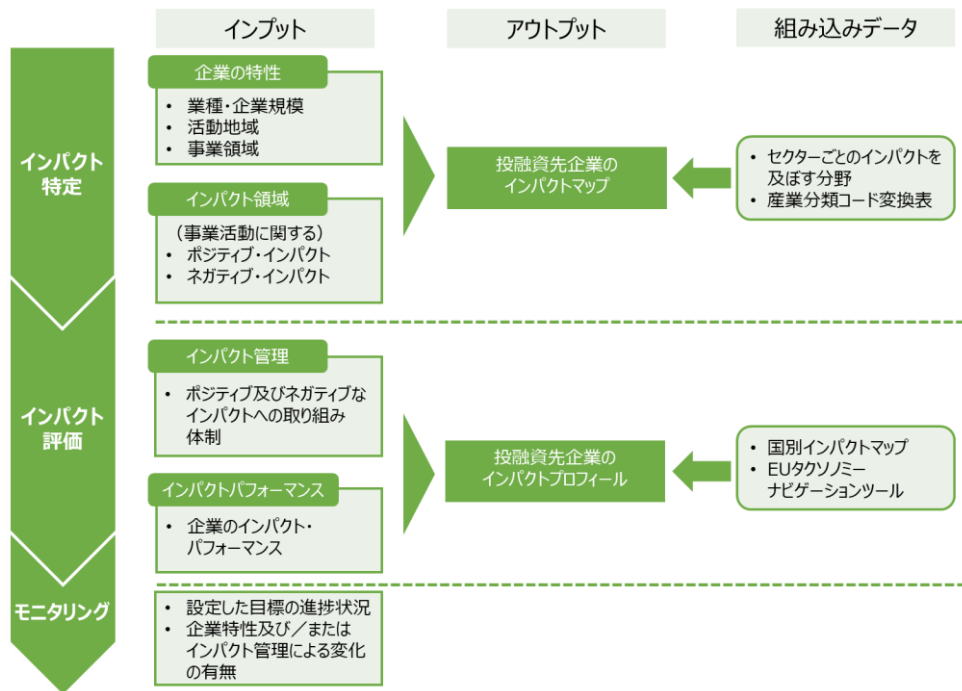


(出所：●●●●)

また、UNEP FI のポジティブインパクト金融原則では、コーポレート・ファイナンスを行う金融機関向けに、企業のインパクト分析を行うためのインタラクティブツール³を公開している。投融資先企業の業種や企業規模、活動地域、事業地域、その事業活動がポジティブ及びネガティブなインパクトを及ぼす領域等を入力することにより、当該企業の及ぼすインパクトの領域や大きさがマッピングされる。こうした分析ツールを使用して重大なインパクト領域を可視化し、そこからコア・インパクトを絞り込むことも有効である。(UNEP FI の分析ツールの具体的な使用方法については付属資料VIを参照)

³ <https://www.unepfi.org/publications/positive-impact-publications/corporate-impact-tool/>。なお、投融資先の企業のインパクト分析を行うためのツールの他に銀行のポートフォリオ分析用のツールも準備されている。

【図4 フローとマッピング例】



(出所: ●●●●)

図4で示しているアウトプットの例では、廃棄物に関して大きなポジティブインパクトが期待される反面、雇用に関してポジティブ、ネガティブ両方の大きなインパクトが予想されている。こうした分野から順次検討し、コア・インパクトの特定を進めること






が可能である。

B) インパクト特定型（プロジェクト・ファンドベース等）

プロジェクトファイナンスやインフラ・不動産ファンド、PE ファンド、一部の上場株式ファンド等におけるインパクトファイナンスがこれに該当する。あらかじめインパクト戦略の中で重視するインパクト領域を定めている場合も考えられるが、投融資案件別のインパクトについては、インパクト評価の段階で改めて考慮する必要がある。

インパクト特定型の場合は、インパクトファイナンスの戦略や投融資対象となるプロジェクト・ファンド等の目的に応じ、生み出そうとするコア・インパクトを独自に特定することとなるが、その基礎となるインパクトの捉え方として、IMP が提唱する「インパクトの5側面」を参考とすることが有効である⁴。IMP は、どのような活動にも人と地球環境に対するインパクトが存在するとの前提に立ち、「何を（What）」、「誰が（Who）」、「どの程度（How much）」、「企業の貢献度合い（Contribution）」、「リスク（Risk）」の5つの側面からインパクトを把握する必要があるとしている（IMP の「インパクトの5側面」の具体的な使用方法については付属資料VIを参照）。

【図5 IMP が提唱するインパクトの5側面】

インパクト側面	各インパクト側面において問う事柄
 何を (What)	<ul style="list-style-type: none">どのようなアウトカムが生じるか。そのアウトカムはポジティブかネガティブか。そのアウトカムは人あるいは地球にとって重要か。
 誰が (Who)	<ul style="list-style-type: none">誰がそのアウトカムを享受するか。その人達はその恩恵を受けてこなかったか。
 どの程度 (How Much)	<ul style="list-style-type: none">そのアウトカムはどのくらい生じるか。（アウトカムを享受する人数、変化の度合い、アウトカムの持続期間など）
 企業の貢献度合い (Contribution)	<ul style="list-style-type: none">そのアウトカムに対する企業の貢献は何か。どんな変化が生じるか。
 リスク (Risk)	<ul style="list-style-type: none">インパクトが予想通り生じなかった場合、どのようなリスクが人や地球にあるか。

出所) IMP ホームページ、O. Prentice & L. Emme (2019) . IRIS+ and the Five

Dimensions of Impact, p.12 を基に CSR デザイン環境投資顧問作成

⁴ なお、こうしたフレームワークやツールの開発は他のイニシアティブでも様々に進められていることを補記しておく。例えば不動産ファンドのインパクト投資については UNEP FI 不動産ワーキンググループより「ポジティブ・インパクト不動産投資フレームワーク」が公表されており

(https://www.unepfi.org/wordpress/wp-content/uploads/2019/06/PI-Real-Estate-Investment-Framework_Japanese.pdf)、2021年1月現在、インパクトを包括的に検討できる分析ツールが開発されている。

上記の5つの側面に関しては、15の具体的なデータカテゴリーとして検討することがIMPによって提唱されている。このデータカテゴリーは投融資のもたらすインパクトを正しく理解し、目標設定や測定のための実践的なツールとして活用可能である。なお、このカテゴリーの利用は任意のものではあるが、これらの参照によって、データの過不足やアセスメントの方向性が明確になるメリットがあると考えられる。

【図6 IMPによるインパクト・データカテゴリー】

インパクト側面	データカテゴリー	詳細説明
 WHAT (何を)	アウトカム	<ul style="list-style-type: none"> 企業とのエンゲージメントでステークホルダーが享受したアウトカムのレベル。
	ステークホルダーにとってのアウトカムの重要性	<ul style="list-style-type: none"> 享受したアウトカムに対するステークホルダーの見解。
	アウトカムの閾値	<ul style="list-style-type: none"> ステークホルダーが肯定的に、あるいは「十分」と考えたアウトカムのレベル。国内あるいは国際的に合意された基準でもよい。
	SDGsとSDGターゲット	<ul style="list-style-type: none"> アウトカムと関係のあるSDGsやSDGターゲット。
 WHO (誰が)	ステークホルダー	<ul style="list-style-type: none"> アウトカムを享受するグループ（人々）
	バウンダリー	<ul style="list-style-type: none"> ステークホルダーがアウトカムを享受する地域や場所
	ベースライン	<ul style="list-style-type: none"> 企業とのエンゲージメント以前にステークホルダーが享受したアウトカムのレベル。
	ステークホルダーの特性	<ul style="list-style-type: none"> ステークホルダーの社会人口学的特性と行動特性
 HOW MUCH (どの程度)	規模	<ul style="list-style-type: none"> そのアウトカムを享受する人の数
	深さ	<ul style="list-style-type: none"> ステークホルダーが享受する変化の度合い
	期間	<ul style="list-style-type: none"> ステークホルダーがアウトカムを享受する期間
 CONTRIBUTION (企業の寄与度合い)	事実に反する深さ	<ul style="list-style-type: none"> ステークホルダーに生じる変化の推定度合い
	事実に反する期間	<ul style="list-style-type: none"> アウトカムが続く推定期間
 RISK (リスク)	リスクの種類	<ul style="list-style-type: none"> インパクトが予想通りではなかった場合のリスクの種類
	リスクレベル	<ul style="list-style-type: none"> リスクのレベル

(出所：●●●●)

(2) コア・インパクトの評価

- インパクト評価に当たっては、まず、創出を目指すポジティブインパクトの大きさを明らかにし、重大なネガティブインパクトが適切に緩和・管理されていることを示すことが必要である。
- 加えて、モニタリングの際に適切な評価が可能となるよう、比較可能な KPI や目標を設定しておくことが併せて重要である。

コア・インパクト領域の特定後は、インパクトの発現状況を投融資後に測定可能なものとするため、それぞれの投融資機会について、特定したポジティブインパクトの創出の可能性及び重大なネガティブインパクトの緩和・管理が適切になされるかを事前に評価することが必要である。それぞれのコア・インパクトについて、必要に応じて定性的な評価を組み合わせながら、KPI 及び目標設定を伴う定量的な事前評価を行うことが望ましい。図7は、事業によって発現するアウトカム（評価指標、KPI）、インパクト領域の一例を示している。

【図7 主なインパクト領域におけるアウトカムの例】

例	(アウトプット)	アウトカム		インパクト領域※
		評価指標・KPI例		
再生可能エネルギー発電事業	再生可能エネルギー発電所の建設	温室効果ガス排出削減	回避された温室効果ガス排出量 (t-CO2e/年) 等	気候
環境に配慮した販売容器の開発	生分解性ポリマーを使用した容器の開発と切替	非生分解性プラスチックの使用削減	自社製品に使用した生分解性材料の量 等	資源効率・安全性
使用済み携帯電話の回収・リサイクル・再販	リサイクル材料を使用した携帯電話の販売	<ul style="list-style-type: none"> ・ 廃棄物削減 ・ バージン素材の使用削減 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 回収したリサイクル材料の量 ・ 携帯電話の製造に使用するバージン素材の量 ・ 携帯電話の製造に使用したリサイクル材料の量 等 	資源効率・安全性
生態系を意識した高速道路	高速道路を跨ぐアニマルブリッジの建設	絶滅危惧種の保護	IUCNレッドリスト並びに国内保全種リスト対象の生物種数 等	生物多様性と生態系サービス

※ 例にとったインパクトが発揮される領域としてUNEP FIのインパクトカテゴリーの中で該当するものを記載

(出所：第4回ポジティブインパクトファイナンスタスクフォース補足資料)

① ポジティブインパクトの創出可能性について

特定したポジティブなコア・インパクトの発生を意図する領域について、見込まれるアウトカムの大きさや発現の確からしさを可能な限り投融資後に比較検証可能な形で評価しておくことが望ましい。

「その案件がなければ提供されなかつたらうインパクトを生み出したかどうか」といった「インパクトの追加性」を考慮することは必須ではないものの、「インパクトウォッシュ」を防ぐためにも、投融資以前から発現している既存のインパクトを後付

けで評価するのではなく、当該投融資を行ったからこそ新たに生み出されるインパクトを特定し評価することが重要である。

② 重大なネガティブインパクトの管理について

重大なネガティブインパクトが発生し得ると判断されたコア・インパクト領域については、重大なネガティブインパクトが発生しないよう適切に管理され、あるいはその影響が適切な水準まで緩和されるよう十分な措置が取られていることを確認する必要がある。

また、インパクト特定型のように、インパクト特定の段階において全てのインパクト領域を必ずしも包括的に分析しない場合においても、重大なネガティブインパクトについては確実に特定し緩和・管理していくことが重要である。例えば、再生可能エネルギー発電事業への投融資の例では、ポジティブなコア・インパクトは気候変動の緩和であると想定される一方で、代表的なネガティブなコア・インパクトとしては、同事業が森林伐採に関わる場合の生態系への影響や騒音等が考えられる。付属資料Ⅱにおいて重大なネガティブインパクトの例を示しているため、参考としていただきたい。

③ KPI・目標設定

ポジティブ、ネガティブそれぞれのコア・インパクトについて、可能な限り定量的な事前評価を行った上で、測定可能な KPI 及び目標を設定しておくことが望ましい。一方で、コア・インパクトの領域によっては、定量的な指標だけでは十分な評価ができず定性的な評価を組み合わせることが妥当な場合も存在すると想定され、この場合は定量評価に加えて定性評価を適切に併用することができる。なお、KPI は定性・定量を問わず、事後評価において達成状況がはっきりと判断できるものに設定することが重要である。

インパクトの発現までの時間軸は必ずしも投融資期間に依らない。例えば、パリ協定の目標や SDGs といった社会全体の長期目標からのバックキャストで目標を設定した場合など、最終的なインパクトを評価するために要する期間が投融資期間を超える場合も考えられる。こうした場合、最終的な目標やビジョンを設定しつつ、同時に、その最終的な目標やビジョンの実現に貢献しうるものとして妥当性をもつ投融資期間等に基づいた KPI や数値目標を設定することが重要である。

KPI や目標の設定に当たっては、各国際的イニシアティブが示しているインパクト評価の指標や算定方法を活用することが有効である。本ガイドの付属資料において代表的な指標及び算定方法の例を示すため、参考としていただきたい。

例えば、GIIN はインパクトの測定・管理を行うためのオンラインツール「IRIS+」を開発・運営している。「IRIS+」では、①プロジェクトが関連するカテゴリー/セクター（エネルギー、農業等）とテーマ（気候等）を指定し、②そのカテゴリーに紐づく

戦略的目標（エネルギーへのアクセス、エネルギー効率性等、気候変動への適応）を選択すると、使用が推奨される指標が自動的に表示される。この指標は、IMP の5側面それぞれについて列挙されるほか、各指標の計算方法が示され、比較可能性が担保されている。（IRIS+の具体的な使用方法については付属資料VIを参照）

【図8-1 IRIS+の使用イメージ：カテゴリー／セクターの選択】



(出所：●●●●)

【図 8-2 IRIS+の使用イメージ：IRIS+によって識別された指標（一部）】

WHAT is the goal?

戦略的 目標	戦略的目標: 小規模エネルギー源からの有害排出量の削減		
	アウトカム: 販売された製品による温室効果ガス削減量により測定した大気汚染の削減		
	主な指標	IRIS で必要とされる データ	計算ガイド
アウトカムの指標	販売した製品による 温室効果ガスの削減	① 販売された製品による温室効果ガス削減の閾値の特定(目標レベルを定める) ② 総販売ユニットまたは販売量の特定 ③ 製品の温室効果ガス排出量の計算 ④ 交換された製品の温室効果ガス排出量の計算 ⑤ 販売された製品による温室効果ガス削減量の計算 総販売ユニットまたは販売量[②] × (交換された製品の温室効果ガス排出量 [④] - 製品の温室効果ガス排出量 [③]).	
ステークホルダー にとってのアウトカムの 重要性	ステークホルダー にとってのアウトカムの 重要性	影響を受ける人々の観点から、介入または投資によるアウトカムの価値または重要性の説明	

WHO is affected?

ステーク ホルダー	主な指標	IRIS で必要とされる データ	計算ガイド
	ステークホルダー のタイプ	ターゲットとなるステークホルダー	介入や投資の対象となる利害関係者のタイプ(クライアントなど)の説明
	ステークホルダー のタイプの特徴	ターゲットとなるステークホルダーの人口統計、社会経済、状況、地理的状況	人口統計学、社会経済学、状況、および地理学の観点から、対象となる利害関係者グループの説明

※上記はインパクト・カテゴリーを「エネルギー」とし、戦略的目標を「小規模エネルギー源からの有害排出量の削減」とした際に、WHAT および WHO の分類で指標とされた項目である。

(CSR デザイン環境投資顧問による仮訳)

なお、重要なインパクト領域が複数ある場合は、それら全てをコア・インパクトとして特定し、KPI を設定することも考えられる。また、社会全体の目標との整合性を取ることをもって KPI とする場合も考えられる。

④ 任意で行う副次的なインパクトの評価について

特定したコア・コンパクトに付随する副次的なインパクトについても、可能な範囲で定性的又は定量的に評価することが望ましい。

グローバル企業を投融資先とする場合等においては、事業において当該企業が直接生み出すインパクトのみならず、サプライチェーン全体において発生し得る副次的なインパクトについて事前評価を行うことが有効である。例えば、植物性食品素材などの一次生産品を原料とし、加工・販売を行う事業においては、当該素材の生産や調達といったサプライチェーンの上流において重大なインパクトが生じる場合もある（類似の具体例については、事例●参照）。

特にネガティブインパクトについては、個社の意図とは必ずしも関係なく発生する

ため、地域や事業セクターの特性を踏まえ、投融資対象企業が生産・販売等の事業活動を行う国・地域だけでなく、材料等の調達先の国・地域等、サプライチェーン全体において包括的な視点から確認することが望ましい。

(3) 評価結果の確認・分類

- インパクトファイナンスの効果を最大化するためには、単にインパクト評価を行うだけではなく、その結果を分類し、現状や次に移行すべきステップを明らかにすることが重要である。

インパクト評価の結果については、ポジティブインパクトの有無やネガティブインパクトの緩和・管理状況等により分類することで、現状の把握・確認を行うことが有効である。評価・分類の結果、インパクトファイナンスに該当しないとの判断になることもあるが、これにより、投融資先企業が、ネガティブインパクトをより軽減しつつ、より大きなポジティブインパクトをもたらしていく望ましい方向に移行していく動機付けとして活用することができる。

「A) インパクト包括型」においては、「基本的考え方」において示した以下の3分類を活用することが有効である。この3分類は、UNEP FIのポジティブインパクト金融原則による分類に基づくものである。

- i) **ポジティブインパクト** - 環境、社会、経済のうち少なくとも一つに大きなポジティブインパクトを与え、重大なネガティブインパクトは適切に緩和・管理されている。
- ii) **ポジティブインパクトトランジション** - 環境、社会、経済のうち少なくとも一つに大きなポジティブインパクトを与えているが、ネガティブインパクトは現在緩和(管理)されていない。しかし、重大なネガティブインパクトを緩和・管理していくために、中長期的なビジョンや移行計画を投融資先企業が策定し実行し始めている等、ポジティブインパクトの分類に移行しうるプロセスに入っている。
- iii) **ポジティブインパクトに該当しない** - ポジティブインパクトの有無にかかわらず、ネガティブインパクトが全く緩和(管理)されておらず、ポジティブインパクトの分類に移行しうるプロセスも行われていない。

インパクトファイナンスの成果を最大化するためには、単にインパクトを評価するだけでなく、評価(measurement)を管理(management)につなげることが重要である。例えば、後述の「(4)インパクトの管理体制の構築」において示すように、重大なネガティブインパクトを適切に緩和・管理するための体制や枠組みの整備を行うことが有効である。

また、ここで「ポジティブインパクトトランジション」に該当したものについても、「ポジティブインパクト」の分類へ引き上げるべく、当該企業に対してエンゲージメントを行っていくことが重要である。一方、直ちに「ポジティブインパクト」へ引き上げられるものばかりではなく、中には、緩和・管理されるべき重大なネガティブインパクトがあり、そのままの状況ではポジティブインパクトに該当し得ない場合も考えられる。そうした場合においても、インパクト評価結果の分類を企業へのエンゲージメントに役

立てることは可能であり、長期的には、社会全体のサステナビリティ向上に向けた一助となり得る。

「B) インパクト特定型」においては、IMP が示す分類を参考とすることが考えられる。IMP では、前述の5側面から把握し評価したインパクトを図9-1に示す5段階で分類する。その大きさは、A(Act to avoid harm: 害の回避)、B (Benefit stakeholders: ステークホルダーへの恩恵)、C (Contribute to Solutions: 課題解決への貢献) の順に大きくなり、進化したインパクト投資となる。このインパクト分類結果を基に、投資先企業全体のインパクト区分を図9-2に沿って特定する。

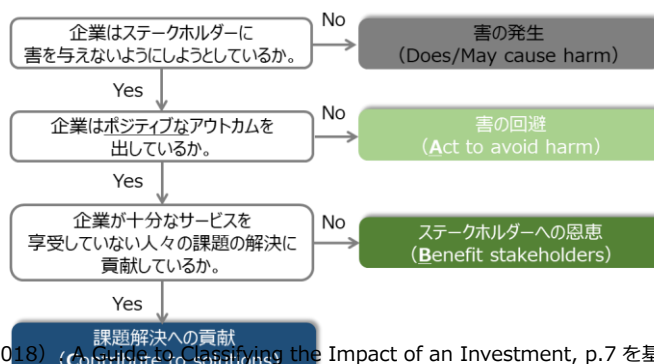
例として図9-3にあるヘルスケアサービスを提供する企業の投資影響のインパクトを紹介する。この企業は投資によりCO2削減という環境へのネガティブな影響を低減しつつ (Effect #1)、ヘルスケアサービスの提供により顧客にも重要なポジティブなインパクトを創出し (Effect #2)、雇用の創出を通じて十分な公共サービスを享受していない人々に適切な収入を提供するという重大なポジティブなアウトカムを出している (Effect #3)。

【図9-1 IMPによるインパクト区分】

インパクトの側面		各インパクト側面の評価結果				
□ 何を		不明	重要でネガティブなアウトカム	重要でネガティブなアウトカム	重要でポジティブなアウトカム	具体的かつ重要でポジティブなアウトカム
○ 誰が		不明	様々	十分なサービスを享受していない人々	様々	十分なサービスを享受していない人々
⋮ どの程度 ・深さ ・規模 ・期間		不明	様々	高度のポジティブな変化	様々	高度のポジティブな変化
		不明	様々	様々	様々	多くの人々に
		不明	様々	様々	様々	長期間
+ 企業の貢献度合い		不明	様々	これまでと同程度あるいはそれ以上	これまでと同程度あるいはそれ以上	これまで以上
△ リスク		不明	様々	様々	様々	様々
インパクト区分		害の可能性あり (May cause harm)	有害である (Does cause harm)	害の回避 (Act to avoid harm)	ステークホルダーへの恩恵 (Benefit stakeholders)	課題解決への貢献 (Contribute to solutions)

(出所: ●●●●)

【図9-2 投融資先企業のインパクト区分】



出所) IMP (2018) *A Guide to Classifying the Impact of an Investment*, p.7 を基に CSR デザイン環境投資顧問作成

【図9-3 投融資先企業のインパクト分類の例】

側面	影響 1	影響 2	影響 3
<p>□ 何を</p> <ul style="list-style-type: none"> 影響と関係があるのはどんなアウトカムか。 そのアウトカムは影響を受ける人や地球にとってどの程度重要か。 	重要でポジティブなアウトカム：CO2排出量	重要でポジティブなアウトカム：ヘルスケアサービスの提供	重要でポジティブなアウトカム：適切な収入
<p>≡ どの程度</p> <ul style="list-style-type: none"> 期間中に生じる影響はどの程度の大きさか。 	最低限の深度	大規模、最低限の変化	重大な変化、大規模、長期間
<p>○ 誰が</p> <ul style="list-style-type: none"> その影響を享受するのは誰か。 その人たちはこれまでどの程度、アウトカムに関して恩恵を受けてこなかったか。 	恩恵を受けてこなかった地球環境	恩恵を受けてきた顧客	恩恵を受けてこなかった従業員
<p>+</p> <p>貢献 度合い</p> <ul style="list-style-type: none"> その影響はいずれ生じるであろう事柄に匹敵するか。 また、その事柄にどの程度寄与するか。 	同程度	より良好	より良好
<p>△ リスク</p> <ul style="list-style-type: none"> どのリスク因子が重要か。 その影響は、期待される成果とどの程度異なるのか。 	低リスク	中リスク	低リスク

}	}	}
害の回避 (Act to avoid harm)	ステークホルダーへの恩恵 (Benefit stakeholders)	課題解決への貢献 (Contribute to solutions)

(出所：●●●●)

(4) インパクトの管理体制の構築

- 意図したポジティブインパクトの発現やネガティブインパクトの緩和・管理を確実に実施するため、インパクトの管理体制を適切に構築しておくことが重要である。

意図したポジティブインパクトが実現され、重大なネガティブインパクトが適切に緩和・管理されるよう、インパクトの管理体制を構築しておくことが重要である。例えば、我が国の金融機関の実践においても、インパクトの管理を通常の与信管理の一環として組み込む、またはインパクトの管理を特別に評価する部署の設立等の方法が実践されている。

インパクトの管理体制には、投融資期間を通じたモニタリングや情報開示が含まれることが必要である。「基本的考え方」において示したとおり、投融資期間中は少なくとも年1回程度以上モニタリングを行い、当該時点での進捗が目標と整合するか否かの確認及びフォローアップに繋げることが望ましい。

投融資後やインパクト評価の際に、エンゲージメントを通じて、適切な管理体制の構築を促すことも重要である。国際的にも、「インパクト測定・マネジメント (Impact Measurement & Management, IMM)」の重要性が議論されている。GIIN や IMP の定義では、IMM とはネガティブインパクトを緩和しポジティブインパクトを最大化する方法を、自身の目的に照らし合わせて考えるプロセスであるとする。IMM においては、測定は過去の事象の振り返りであり、マネジメントは、未来を見据えてインパクトを改善し又は最大化するためにどのように意思決定をするかを考えることであると表現されている。このように、IMM の実施とはインパクトのパフォーマンスの評価に留まるものではなく、4つのプロセス (①投融資によるインパクトのゴールの設定、②ゴールを実現するための戦略の定義、③評価指標の選択と目標の設定、④インパクトのパフォーマンスの管理) をフローとして繰り返し行うことで初めて適切になされるものであると理解することができる。⁵

⁵ <https://thegiin.org/imm/#what-is-imm>

3. 独立した評価を行う場合

- インパクトファイナンスを標榜するためには、適切なインパクト評価がなされていることが求められる。この適切性を担保するため、独立した機関による評価を受けることで、客観的な説明を行うことが有効である。

(1) 独立評価が望ましい場合

インパクトファイナンスのフレームワークや評価結果について、客観的評価が必要であると判断される場合には、独立性を有する機関によるレビュー（独立した評価）を受ける等により、客観性を担保することが望ましい。例えば、特に以下のような場合においては、レビューを活用することが有効であると考えられる。

- ・ 既存のフレームワークへの適合性や、「インパクトウォッシュ」⁶に当たらないことを客観的に証明したい場合
- ・ 自らが行うインパクトファイナンスについて、フレームワークやインパクト評価の基準、その評価結果の適切性を判断する知見が投資家/金融機関自身に十分に備わっておらず、これらの適切性について客観的評価が必要と判断される場合
- ・ 投融資を予定している案件が比較的特殊なものであり、そのインパクトの算定に用いることができる既存のフレームワークや指標などが存在しない場合に、自ら策定したインパクトの算定方法の適切性について客観的評価が必要と判断される場合
- ・ 当該金融商品が想定する投資家やステークホルダーのインパクトファイナンスへの理解を促進することが必要と判断される場合

(2) 評価機関

独立評価を受ける場合には、インパクトファイナンスに関する十分な専門的知識を有する機関に評価を依頼することが重要である。専門的知識を有する外部機関のほか、一定の独立性を有する内部の部門に評価を依頼することも考えられる。

(3) 評価すべきポイント（特定したインパクトの事前評価結果、モニタリング結果）

独立評価に当たっては、特定されたコア・インパクトそのものだけでなく、インパクトの事前評価プロセスの妥当性を重視すべきである。事前評価の段階において、ポジティブインパクトを生み出し、重大なネガティブインパクトを緩和・管理するためのフレームワークが適切に構築されていれば、モニタリングは当該フレームワークに則って適切に実施されることが期待される。

なお、評価者は、その評価対象の合理性やフレームワークへの準拠性等に留意して評価を行うことが望ましい。

⁶ ポジティブインパクトを与え、ネガティブインパクトを緩和・管理すると主張・標榜しながらも、実際はポジティブインパクトがない、又は不正に水増しされていた、ネガティブインパクトが適切に緩和・管理されていなかったなど、その実態が伴わないことを指す。

(4) 評価結果の開示の範囲

独立評価の結果を開示することにより、金融市場関係者やステークホルダーに対し、自らが行うインパクトファイナンスについて、フレームワークの適切性や見込まれるポジティブインパクトの大きさ等を客観的に説明することが可能となる。一方で、相対でのコーポレート・ファイナンスなど、評価結果の第三者への開示が困難な場合も想定される。こうした場合は、独立評価の結果のうち、インパクトファイナンスであることを主張・標榜するために必要な情報を、秘密保持契約等に反しない範囲で開示する、当事者間での開示に留めるなど、開示の範囲を絞ることも考えられる（インパクト評価の開示事例については、付属資料●を参照）。

- 付属資料 -

I. 「インパクトファイナンスの基本的考え方」(2020年7月取りまとめ)

【本文のみ】

II. ポジティブインパクトの発現に伴う重大なネガティブインパクトの例

事業例	ポジティブインパクト発現を目指す UNEP FI カテゴリー	付随して発現しうる重大なネガティブインパクト例	対応する UNEP FI カテゴリー
再生可能エネルギーに関する事業			
太陽光発電事業	気候、エネルギー、大気等	農地の他用途への転換	食糧
		生態系の破壊	生物多様性と生態系サービス
		濁水の流出	水(質)
		表土等土壌の流出	土壌
		景観への悪影響	文化・伝統
		関連設備からの騒音・振動	—
風力発電事業	気候、エネルギー、大気等	農地の他用途への転換	食糧
		生態系への悪影響(バードストライク等)	生物多様性と生態系サービス
		景観への悪影響	文化・伝統
		低周波騒音、振動	—
水力発電事業	気候、エネルギー、大気等	生態系への悪影響(魚類の遡上障害等)	生物多様性と生態系サービス
		景観への悪影響	文化・伝統
		既存の住民・事業者の立ち退き、破壊	包摂的で健全な経済
バイオマス発電事業	気候、エネルギー、大気等	バイオマス燃料のライフサイクル全体での GHG 排出量の増加	気候
		施設・搬入用車両からの排ガスによる大気汚染	大気
		燃料生産地における違法伐採や廃熱による生態系への悪影響	生物多様性と生態系サービス
		施設からの排水による悪影響	水(質)
		騒音	—
地熱発電事業	気候、エネルギー、大気等	土地造成に伴う生態系への悪影響	生物多様性と生態系サービス
		毒性のある気化性物質の放出	大気
		景観への悪影響	文化・伝統
再エネ由来の電気関連設備設置、	気候、エネルギー、大気等	自然保護地域への設置	生物多様性と生態系サービス

維持管理などを行う事業			
再エネ関連の機器を製造する事業	気候、エネルギー、大気等	製造過程において発生する有害物質の排出	大気、水(質)、土壌、生物多様性と生態系サービス等
		農地の他用途への転換	食糧
		大規模な土地造成に伴う生態系への悪影響	生物多様性と生態系サービス
		水ストレスの高い地域での大量の水の使用	水(入手可能性)
		エネルギー使用量の増大	エネルギー
太陽熱、地中熱等の再生可能エネルギー熱利用を行う事業	気候、エネルギー、大気等	地下水や地盤の温度や質の変化による生態系等への悪影響	大気、水(質)、土壌、生物多様性と生態系サービス等
省エネルギーに関する事業			
ZEH、ZEB等省エネ性能の高い建築物の新築	エネルギー等	工事に伴う騒音、振動	—
		光害など周辺への悪影響	文化・伝統
環境認証を取得するための改修	エネルギー等	工事に伴う騒音、振動	—
		アスベスト等の有害廃棄物の飛散	土壌等
省エネ性能の高い機器や設備の導入	エネルギー等	交換前の機器や設備の不適正処理による悪影響	廃棄物等
スマートグリッドに関する装置の開発、導入	エネルギー等	工事に伴う騒音、振動	—
汚染の防止と管理に関する事業			
サーキュラー・エコノミーの実現に資する事業	廃棄物、資源効率・安全性等	有害化学物質の飛散、流出等による悪影響	大気、水(質)、土壌、生物多様性と生態系サービス等
		廃棄物の処理に伴う排ガスによる大気汚染	大気

		排水による水質汚濁	水(質)
		非効率なリサイクルによるライフサイクルで見た環境負荷の増大	廃棄物、資源効率・安全性等
		特定の業種における雇用の減少	雇用
有害化学物質の漏洩、揮発、浸透等の防止に関する事業	廃棄物、生物多様性と生態系サービス等	有害化学物質の不適正処理による悪影響	大気、水(質)、土壌、生物多様性と生態系サービス等
		代替物質の環境排出による悪影響	大気、水(質)、土壌、生物多様性と生態系サービス等
フロン類の大気中への排出の防止、回収	気候、大気、生物多様性と生態系サービス等	不適正な処理による悪影響等	大気、水(質)、土壌、生物多様性と生態系サービス等
工場等からの排水の高度な処理、再利用に資する設備導入	水(質)、廃棄物等	重金属等の有害化学物質を含む汚泥の不適正処理による悪影響	水(質)、土壌、生物多様性と生態系サービス等
汚染土壌を処理する事業全般	土壌等	汚染土壌の処理に伴う排ガスの発生	大気
		汚染土壌の処理に伴う排水の発生	水(質)
		汚染土壌の不適切処理による悪影響	土壌・生物多様性と生態系サービス
自然資源の持続可能な管理に関する事業			
漁業や水産養殖業について MSC・ASC 等の持続可能性に係る認証取得に関する事業	生物多様性と生態系サービス等	不適正な処理による悪影響等	水(質)、生物多様性と生態系サービス等
林業について FSC 等の持続可能性に係る認証を受け	生物多様性と生態系サービス等	不適正な処理による悪影響等	土壌、生物多様性と生態系サービス等

るために行 う事業			
生物多様性保全に関する事業			
水質改善等 による湿地 やサンゴ礁 の保全事業	生物多様性と生態系サー ビス等	大規模な土地造成に伴う生態系への悪影響	生物多様性と生態系 サービス
		対象地域の遺伝子プールのかく乱	生物多様性と生態系 サービス
鳥獣や外来 種による生 態系被害防 止のための 鳥獣害や外 来種の防除 事業	生物多様性と生態系サー ビス等	使用する鉛弾による野鳥の鉛中毒等の生態 系への悪影響	生物多様性と生態系 サービス
		外来植物の刈り取り時における種子の飛散等	生物多様性と生態系 サービス
河川の護岸 の再生事業	生物多様性と生態系サー ビス等	大規模な土地造成に伴う生態系への悪影響	生物多様性と生態系 サービス
		造成に伴う廃棄物の不適正な処理	廃棄物・土壌・水(質) 等
クリーンな運輸に関する事業			
低公害車の 開発、製造 インフラ整備	気候、エネルギー、大気 等	農地の他用途への転換	食糧
		大規模な土地造成に伴う生態系への悪影響	生物多様性と生態系 サービス
		水ストレスの高い地域での大量の水の使用	水(入手可能性)
		エネルギー使用量の増大	エネルギー
		レアメタル等金属の不適切な採掘・使用・廃棄 等	土壌
		廃棄物量の増加や有害化学物質の不適正な 処理による悪影響	廃棄物
モーダルシ フト等による 物流システ ムの効率化	気候、エネルギー、大気 等	農地の他用途への転換	食糧
		大規模な土地造成に伴う生態系への悪影響	生物多様性と生態系 サービス
		騒音・振動の発生	—
		特定の場所、時間帯に集中ことによる大気汚 染	大気
エコドライブ 支援機器の 導入	気候、エネルギー、大気 等	関連機器の不適正な導入による悪影響等	大気、生物多様性と 生態系サービス等

パークアンドライド、カーシェアリング関連施設の整備	気候、エネルギー、大気等	農地の他用途への転換	食糧
		大規模な土地造成に伴う生態系への悪影響	生物多様性と生態系サービス
		事業拠点付近における騒音・振動の発生	—
		施設付近における大気汚染	大気
		施設付近における廃棄物発生	廃棄物
持続可能な水資源管理に関する事業			
水循環保全事業	水(入手可能性)、水(質)等	大規模な土地造成に伴う生態系への悪影響	生物多様性と生態系サービス
		外来種等の不適切な植栽の導入	生物多様性と生態系サービス
水害防止施設の整備	気候等	大規模な土地造成に伴う生態系への悪影響	生物多様性と生態系サービス
海水淡水化事業	水(入手可能性)等	濃縮水の放流等による生態系への悪影響	生物多様性と生態系サービス
		エネルギー効率の悪い装置や方法の採用による温暖化への悪影響	気候
気候変動に対する適応に関する事業			
防災機能を強化する事業	気候等	農地の他用途への転換	食糧
		大規模な土地造成に伴う生態系への悪影響	生物多様性と生態系サービス
環境配慮製品、環境に配慮した製造技術・プロセスに関する事業			
環境認証を取得する製品の製造	水(質)、大気、土壌、生物多様性と生態系サービス、資源効率・安全性、気候、廃棄物等	農地の他用途への転換	食糧
		大規模な土地造成に伴う生態系への悪影響	生物多様性と生態系サービス
		水ストレスの高い地域での大量の水の使用	水(入手可能性)
		エネルギー使用量の増大	エネルギー
		製造段階において使用される有害物質の漏洩	土壌
		廃棄物量の増加や有害化学物質の不適正な処理による悪影響	廃棄物
GHG削減に資する技術や製品の研究開発及び導入	気候等	農地の他用途への転換	食糧
		水ストレスの高い地域での大量の水の使用	水(入手可能性)
		エネルギー使用量の増大	エネルギー
		大規模な土地造成に伴う生態系への悪影響	生物多様性と生態系サービス
		製造段階において使用される有害物質の漏洩	土壌

	廃棄物量の増加や有害化学物質の不適正な 処理による悪影響	廃棄物
--	---------------------------------	-----

III. インパクト領域ごとの評価指標の例

ここではグリーンインパクトに特に関連が深い「気候変動」「資源循環（サーキュラーエコノミー）」「生物多様性」に関して使用できると考えられる既存の評価指標を例として示すものである。ここで示すものはあくまでも一例であり、使用する指標は必要に応じて追加、選択することができるが、使用する指標が発現を目指すインパクトを計測するものであるかの妥当性については十分な精査が必要である。

なお、ここでは IRIS 評価指標カタログからの項目、GRI の項目で対応すると考えられる項目、併せて、見つけられる場合は各カテゴリーに特化した指標項目を併記しているが、各指標の使用についてはその指標の性質、指標セットの性格の理解が不可欠であることを補記したい。例えば、IRIS 評価指標カタログは、過去案件等で用いられた指標を収録した「一覧」であり、使用にあたってはここに収録された指標を自由に選択できるが、これ自体は系統立てて整理・準備されたものではない。これに対し、GRI、CDP や SASB の指標群はある分野について網羅的に報告するための「セット」として用いられることを前提として提供されるものである。また、GRI は事業セクターを横断的に捉え、企業の財務的重要性のみならず、「環境」「社会」「経済」に関して社会的な重要性を意識した（マルチステークホルダーを対象とした）網羅的な指標となっているが、例えば SASB 等は事業セクターの特性に直結しており、報告企業の財務的重要性を特に意識した指標を中心に整理したものである。このように、既存の指標の使用にあたってはこうした指標群の成立に関する文脈にも注意を払う必要がある。

【気候変動】

IRIS 「Climate Change」		GRI 305 「大気への排出」		CDP 「Climate Change」 2020	
番号	項目名	番号	項目名	番号	項目名
OI8237	温室効果ガス(GHG)排出戦略				
OI1479	温室効果ガス(GHG)排出：合計			C5.1	基準年と基準年の排出量（スコープ1および2）を記入
OI4112	温室効果ガス(GHG)排出：直接	305-1	直接的な温室効果ガス（GHG）排出量（スコープ1）	C6.1	御社のスコープ1全世界総排出量は何CO2換算メートルトンでしたか？
OI9604	温室効果ガス(GHG)排出：間接	305-2	間接的な温室効果ガス（GHG）排出量（スコープ2）	C6.3	御社のスコープ2全世界総排出量は何CO2換算メートルトンでしたか？
OI6774	購入したカーボンオフセットによって回避された温室効果ガス(GHG)排出				
OI2436	購入したカーボンクレジット額				
PI2787	販売されたカーボンオフセットにより回避された温室効果ガス(GHG)排出				
PI7015	販売のために生成されたエネルギーが生み出した温室効果ガス(GHG)排出				
PD9427	商品のGHG排出	305-3	その他の間接的な温室効果ガス（GHG）排出量（スコープ3）		
PD2243	代替製品からの温室効果ガス(GHG)排出				
PI5376	製品販売による温室効果ガス削減量				
OI5951	軽減された温室効果ガス(GHG)排出				
PI9878	隔離された温室効果ガス(GHG)排出				
PI2764	回避された温室効果ガス(GHG)排出				
OI4862	温室効果ガス(GHG)排出削減	305-5	温室効果ガス（GHG）排出量の削減		
OI5732	温室効果ガス(GHG)排出の種類				
OI9839	温室効果ガス(GHG)排出軽減の種類				
		305-4	温室効果ガス（GHG）排出原単位		
		305-6	オゾン層破壊物質（ODS）の排出量		
		305-7	窒素酸化物（NOx）、硫黄酸化物（SOx）、およびその他の重大な大気排出物		

【資源循環（サーキュラーエコノミー）】

IRIS「Pollution」「Waste」		GRI 301「原材料」 306「排水および廃棄物」		SASB「Management of Leachate & Hazardous Waste」「Recycling & Resource Recovery」		エレン・マッカーサー財団 「Circularity Outcome指標」	
番号	項目名	番号	項目名	番号	項目名	番号	項目名
Q11346	廃棄物発生量:有害廃棄物			IF0201-09	有害化学物質総排出量 (Total Toxic Release Inventory (TRI)) 並びに河川・海洋への排出割合		
		306-4	有害廃棄物の輸送				
		301-1	使用原材料の重量または体積				
Q14483	廃棄物:埋め立て処分されたもの	306-2	種類別および処分方法別の廃棄物	IF0201-17	焼却された廃棄物量、有害物質の割合、エネルギー回収に用いられた割合	Outputs 7a.	テクニカルサイクルに適した材料の outflow (質量ベース)のうち、埋立/焼却される廃棄物/副産物の割合
Q15101	生分解性材料			IF0201-18	消費者に対して提供された(1)リサイクル(2)堆肥化サービスの割合 (消費者のタイプ別に)		
Q16192	廃棄物:合計			IF0201-19	(1) リサイクルされた及び(2)堆肥化された原材料の量		
Q16209	製品ライフサイクルの管理慣行			IF0201-20	回収された電子廃棄物量、及びリサイクルを通じて還元された量		
Q16709	廃棄物生成量:合計						
Q17442	廃棄物:非有害廃棄物						
Q17920	削減した廃棄物						
Q18357	廃棄物:焼却されたもの						
Q18843	廃棄物:その他						
Q19847	廃棄物:堆肥化されたもの						
						Outputs 7g.	リユースされる製品について、製品寿命に達するまでの平均使用回収
						Outputs 7h.	生産するエネルギーのうち再生可能エネルギーの割合
						Outputs 7i.	年間総エネルギー生産量
PD9364	リサイクル材料の使用率	301-2	使用したリサイクル材料			Inputs 6a.	テクニカルサイクルに適した材料の製造工程への投入量割合
		301-3	再生利用された製品と梱包材			Inputs 6b.	バイオロジカルサイクルに適した材料 (再生可能) で使用中に消耗/劣化するものうち、以下が原材料/材料の投入量に占める割合
						Inputs 6c.	事業活動に使用するエネルギーのうち再生可能エネルギーの占める割合

【生物多様性】

※生物多様性に関しては2021年1月現在、TNFD（自然関連財務情報開示タスクフォース：Task Force on Nature-related Financial Disclosures）、Science-based target for Nature 等による評価指標制定の動きがある。

IRIS 「Biodiversity and Ecosystems」		GRI 304 「生物多様性」	
番号	項目名	番号	項目名
PI6372	顧客個人：小規模農家		
PD1620	作物の種類		
OI5408	直接管理地：合計（その内訳）		
OI1674	直接管理地；耕作された		
OI6912	直接管理領域：持続的に管理された		
OI2569	直接管理領域：農業で処理された		
OI9891	農業の使用		
PI3789	間接管理地：合計（その内訳）		
PI7403	間接管理地：耕作された		
PI6796	間接管理地：持続的に管理された		
		304-1	保護地域および保護地域ではないが生物多様性価値の高い地域、もしくはそれらの隣接地域に所有、賃借、管理している事業サイト
PI9151	絶滅危惧種の数	304-4	事業の影響を受ける地域に生息するIUCNレッドリストならびに国内保全種リスト対象の生物種
PD6429	種の保全状況		
PD2584	種の生息地		
PD6363	種の絶滅の脅威	304-2	活動、製品、サービスが生物多様性に与える著しいインパクト
OI5929	生物多様性評価	304-3	生息地の保護・復元
OI1618	絶滅危惧種規程/規則		
OI2767	保護区域の連結性評価		

IV. インパクトの算定方法の例

以下は、環境省「グリーンボンドガイドライン 2020 年版」（付属書 5 環境改善効果の算定方法の例）にあるインパクトの算定方法例を示した。

事業例	アウトカム指標例	算定方法例	参照元
再生可能エネルギーによる発電事業	CO2 排出量の削減	CO2 削減量＝ (年間発電量－年間発電補機消費電力量) × 電力 CO2 排出係数	資源エネルギー庁・環境省「グリーンエネルギーCO2 削減相当量認証制度運営規則」
建築物における省エネルギー設備、コージェネレーションシステムの導入	建物全体の CO2 排出量の削減	CO2 排出削減量＝ (改修前年間電力使用量×電力排出係数 ＋改修前年間都市ガス使用量×都市ガス 単位発熱量×都市ガス炭素排出係数× 44/12)－(改修後年間電力使用量×電力 排出係数＋改修後年間都市ガス使用量× 都市ガス単位発熱量×都市ガス炭素排出 係数×44/12) ※44/12 は炭素排出量を CO2 排出量に 換算するための係数。	環境省「温室効果ガス排出量算定・報告マニュアル(Ver4.2) 第Ⅱ編 温室効果ガス排出量の算定方法」
公共用水域に放流する工場排水の処理設備を更新する事業	BOD(生物化学的酸素要求量) 負荷削減量	BOD 負荷削減量＝ (排水処理設備更新前の放流水の年間平均 BOD－排水処理設備更新後の放流水の年間平均 BOD)×1 日あたり平均排水量×稼働日数	環境省「環境報告ガイドライン」
植林事業	年間炭素吸収量	年間炭素吸収量＝ {幹の体積の増加量×拡大係数×(1+地上部・地下部比)×容積密度×炭素含有率} －ベースライン年間炭素吸収量	林野庁・森林総合研究所「森林による炭素吸収量をどのように捉えるか ～京都議定書報告に必要な森林吸収量の算定・報告体制の開発～」
高木による都市緑化に係る事業	年間 CO2 吸収量	年間 CO2 吸収量＝ 〈北海道以外の場合〉 0.0385(t-CO2/本・年)×高木本数(本)	国土交通省「低炭素まちづくり実践ハンドブック資料編」

		<p><北海道の場合> 0.0359 (t-CO₂/本・年) × 高木本数 (本)</p>	
貨物輸送における自動車から鉄道へのモーダルシフト事業	CO ₂ 排出量の削減量	<p>CO₂ 排出量の削減量＝ 年間貨物総輸送量 × (貨物車の CO₂ 排出量原単位－貨物鉄道の CO₂ 排出量原単位)</p>	<p>経済産業省及び国土交通省「物流分野の CO₂ 排出量に関する算定方法ガイドライン」</p>
電気自動車の新規購入者への融資事業	一般ガソリン普通乗用車を購入した場合と比較した CO ₂ 排出量の削減量	<p>CO₂ 排出削減量＝ [(融資対象台数 × 平均年間走行距離 (km/年)) ÷ ガソリン普通乗用車の燃費] × ガソリン単位発熱量 × ガソリン炭素排出係数 × 44/12]－ [(融資対象台数 × 平均年間走行距離 (km/年)) ÷ 電気自動車の電費 × 電力の CO₂ 排出係数]</p> <p>※44/12 は炭素排出量を CO₂ 排出量に換算するための係数</p>	<p>経済産業省及び国土交通省「物流分野の CO₂ 排出量に関する算定方法ガイドライン」</p>
気候変動適応事業として行う、河川氾濫による浸水の影響を抑制する放水路の建設事業	減少する想定浸水面積と想定被害家屋数	<p>想定浸水面積の減少＝ 建設前想定浸水面積－建設後想定浸水面積</p> <p>想定被害家屋数の減少＝ 建設前被害家屋数－建設後被害家屋数</p>	<p>※特になし。想定浸水区域のマッピング方法については以下参照。 国土交通省「洪水浸水想定区域図作成マニュアル(第4版)」 国土交通省「中小河川浸水想定区域図作成の手引き」</p>
工場の製造工程の省エネ化事業	生産する製品1トンあたりの CO ₂ 排出量の削減量	<p>生産する製品1トンあたりの CO₂ 排出量 (原単位)削減量＝ (改修前年間電力使用量 × 電力排出係数 + 改修前年間 A 重油使用量 × A 重油単位発熱量 × A 重油炭素排出係数 × 44/12) ÷ 年間製品生産量－ (改修後年間電力使用量 × 電力排出係数 + 改修後年間 A 重油使用量 × A 重油単位発熱量 × A 重油炭素排出係数 × 44/12) ÷ 年間製品生産量</p> <p>※44/12 は炭素排出量を CO₂ 排出量に換算するための係数。</p>	<p>環境省「温室効果ガス排出量算定・報告マニュアル(Ver4.2) 第Ⅱ編 温室効果ガス排出量の算定方法</p>

V. インパクトファイナンス事例集

【こちらについてはまとめ方を整理して追記します。】

VI. 代表的なツール類の使い方

UNEP FI の「コーポレート分析ツール」の活用方法

UNEP FI では、企業の活動によって発現するインパクトを整理するための参考として、Excel を用いたワークシート「コーポレート分析ツール」を提供している。このツールでは投融資先企業の規模、従事する事業セクターとその売上（あるいは収益）比率、各事業が展開する国・地域を入力すると、まず、対応する国・地域におけるインパクトの重要度を表すカンントリーニーズスコアの初期設定値がインパクト・カテゴリーごとに表示される（この値は利用者によって適宜調整が可能）。このツールでは事業セクターとこのカンントリーニーズスコア（あるいはユーザーによって調整された値）の情報をを用い、発現が特に予想されるポジティブインパクトとネガティブインパクトの領域を UNEP FI のインパクト・レーダーの項目に従った形で表示することが可能である。

【ツール使用の流れ】

該当企業の情報を入力する。まず、企業の種別と規模、従事する事業セクター、その事業セクターの企業内での売上比、事業の規模を入力している。

Unprotect Worksheet and click the (+) button above to view Explanatory Notes.

I. IDENTIFICATION (1/3)		
A. Company cartography		
1. Size & type of company <i>Please select one from the dropdown list.</i>	Corporate	100%
2. Main sectors & activities as per ISIC <i>Please select all relevant items from the dropdown list (one per column).</i>	SECTOR 1 1702 Manufacture of corrugated paper and paperboard and of containers of paper and paperboard	SECTOR 2 1812 Service activities related to printing
2.1. Proportion of the business involved in each sector <i>Indicate % for each. Use revenue/turnover by default, except where EBITDA (Earnings Before Interest, Taxes, Depreciation and Amortization) or fixed assets are more relevant.</i>	80%	20%
3. Is the company within the top 10 companies of its sector globally or top 5 companies regionally or locally? <i>Indicate yes or no for each sector. If yes, please specify ranking & source.</i>	Yes	No

【図●-● 事業情報の入力】

続いて事業ごとに展開する国・地域の情報を入力する。ここでは事業の販売・提供活動を行っている国・地域、製造を行っている国・地域、原材料を調達している国・地域についてそれぞれその国・地域名と比率を入力する。

4. Where is the company operating?				5. Is the company a top 10 company within any of the listed countries?			
Countries of sales (% of revenue/turnover, EBITDA or fixed assets)				Countries of production (% of value or volume)			
Cells of this color- enter country of operation				Cells of this color- enter country of operation			
Cells of this color- enter sector % of sales in the country				Cells of this color- enter sector % of production in the country			
Cells of this color- enter if company is within the top 10 companies of the country				Cells of this color- enter if company is within the top 10 companies of the country			
#1	#2	#3	#4	#1	#2	#3	#4
	United States of America	Mexico	Canada		Canada	United States of America	
	80%	30%	10%		100%	50%	
#5	#6	#7	#8	#5	#6	#7	#8
#9	#10	#11	#12	#9	#10	#11	#12
#13	#14	#15	#16	#13	#14	#15	#16
#17	#18	#19	#20	#17	#18	#19	#20
#21	#22	#23	#24	#21	#22	#23	#24
#25	#26	#27	#28	#25	#26	#27	#28
#29	#30	#31	#32	#29	#30	#31	#32
#33	#34	#35	#36	#33	#34	#35	#36
#37	#38	#39	#40	#37	#38	#39	#40

【図●-● 事業が関与する国・地域の情報の入力】

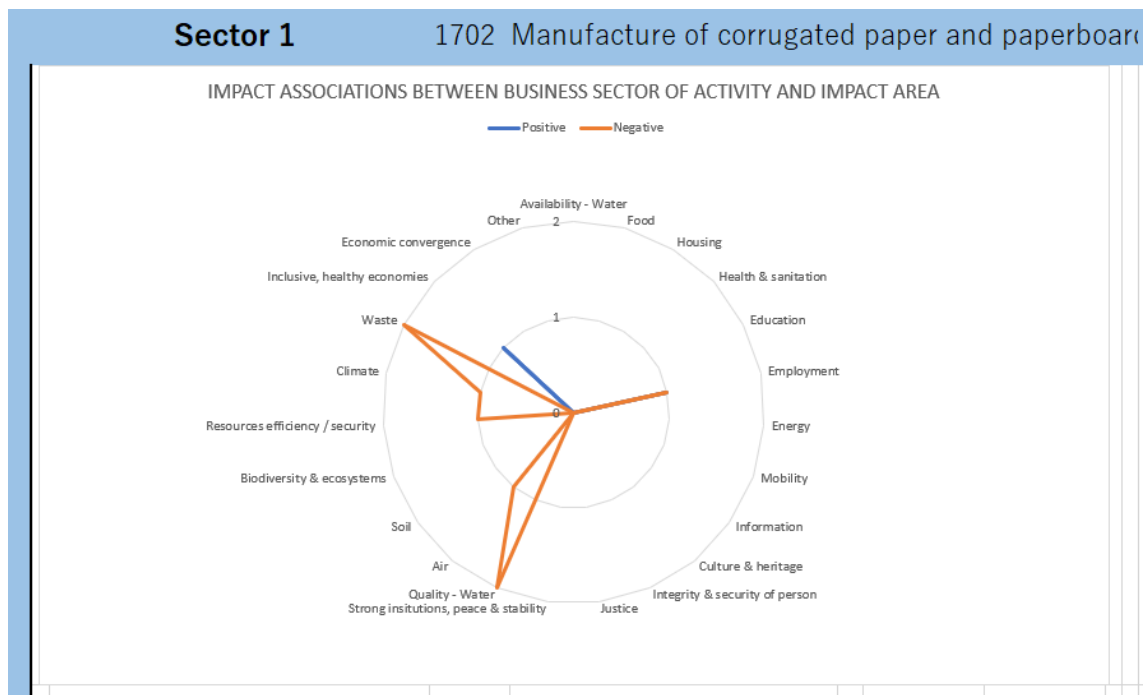
関連する国・地域に関する各インパクト・カテゴリーのカントリースコアの初期値が表示される。2021年1月時点ではカントリーニーズスコアの初期値が未設定となっている国・地域が多数を占めるため、必要に応じてユーザーが値を設定する。

I. IDENTIFICATION (2/3)						
B. Country Needs (Overview)						
Below is the specific sub-set of countries relevant to your bank, as per your selection of countries in A.Cartography. The table shows both default values of t available), and your consolidated values, as captured in the previous worksheet (Country need scores). NB. The impact profiles are generated on the basis of the values under 'my values'.						
			Impact Area (as per PJ Impact Radar) Availability, accessibility, affordability and quality of...			
			Availability - Water	Food	Housing	Hea
1	Canada	Default values	2	1	2	
2		My values				
1	China	Default values	no default value	no default value	no default value	n
2		My values				
1	Mexico	Default values	no default value	no default value	no default value	n
2		My values				
1	New Zealand	Default values	no default value	no default value	no default value	n
2		My values				
1	Puerto Rico	Default values	no default value	no default value	no default value	n
2		My values				
1	Russian Federation	Default values	no default value	no default value	no default value	n

【図●-● 事業が関与する国・地域のカントリーニーズスコア】

ここまで入力した情報をもとに、アウトプットとして事業別にインパクト・レーダーが生成される。下記の例（段ボール等の製造業）では「包摂的で健全な経済」へのポジティブ

インパクトの発現が予想されているが、特に「廃棄物」と「水（質）」へのネガティブインパクトが懸念されている。



【図●-● 生成されたインパクト・レーダー】

以上

Impact Management Project の「インパクトの5側面」の活用方法

IMPでは、どんなインパクトでも、測定の際は「インパクトの5側面」について15種類のデータを収集することを推奨しており、分析ツールとして「Impact Data Categories Template」を提供している（図●参照）。このツールはExcelを用いた表形式となっており、投融資先企業のインパクト測定を行う際のテンプレート、あるいは既存データがインパクトの5側面を十分カバーできているかを確認する際のチェックリストとして、投資家や企業が活用することを想定している。

Dimension	Impact category	Definition	Impact 1: _____			
			Indicator	Data	Source	Assessment
What	i Outcome level in period	The level of outcome experienced by the stakeholder when engaging with the enterprise. The outcome can be positive or negative, intended or unintended.				Positive / negative
	Outcome threshold	The level of outcome that the stakeholder considers to be a positive outcome. Anything below this level is considered a negative outcome. The outcome threshold can be a nationally or internationally-agreed standard.				
	Importance of the outcome to stakeholder	The stakeholder's view of whether the outcome they experience is important (relevant to other outcomes). Where possible, the people experiencing the outcome provide this data, although third-party research may also be considered. For the environment, scientific research provides this view.				
	SDG target or other global goal	The Sustainable Development Goal target or other global goal that the outcome relates to. An outcome might relate to more than one goal.				Important / unimportant
Who	Stakeholder	The type of stakeholder experiencing the outcome.				
	Geographical Boundary	The geographical location where the stakeholder experiences the social and/or environmental outcome				
	ii Outcome level at baseline	The level of outcome being experienced by the stakeholder prior to engaging with, or otherwise being affected by, the enterprise				Well-served / underserved
	Stakeholder characteristics	Socio-demographic and/ or behavioural characteristics and/or ecosystem characteristics of the stakeholder to enable segmentation				
How Much	Scale	The number of individuals experiencing the outcome. When the planet is the stakeholder, this category is not relevant.				Large scale / small scale
	Depth	The degree of change experienced by the stakeholder. Depth is calculated by analysing the change that has occurred between the 'Outcome level at baseline' (Who - ii) and the 'Outcome level in period' (What - i).				Deep change / marginal change
	Duration	The time period for which the stakeholder experiences the outcome				Long term / short term
Contribution	Depth counterfactual	The estimated degree of change that would have happened anyway - without engaging with, or being affected by, the enterprise. Performance of peer enterprises, industry or local benchmarks, and/or stakeholder feedback are examples of counterfactuals that can be used to estimate the degree of change likely to occur anyway for the stakeholder.				Likely better / likely worse
	Duration counterfactual	The estimated time period that the outcome would have lasted for anyway - without engaging with, or being affected by, the enterprise. Performance of peer enterprises, industry or local benchmarks, and/or stakeholder feedback are examples of counterfactuals that can be used to estimate the duration likely to occur anyway for the stakeholder.				Likely better / likely worse
Risk	Risk type	The type of risk that may undermine the delivery of the expected impact for people and/or the planet. There are nine types of impact risk.				Low risk / high risk
	Risk level	The level of risk, assessed by combining the likelihood of the risk occurring, and the severity of the consequences for people and/or the planet if it does.				
Impact classification		The impact of an enterprise can be classified as: 1. Act to avoid harm 2. Benefit stakeholders 3. Contribute to solutions Note that if insufficient data exists for all dimensions for all stakeholders, the enterprise may be causing harm.	Impact classification: Enterprise's overall impact classification:			

図● Impact Data Categories Template (一部抜粋)

出所：Impact Management Project ホームページ⁷

⁷ Impact Data Categories Template は、次の URL からダウンロードできる。

https://29kjwb3armds2g3gi4lq2sx1-wpengine.netdna-ssl.com/wp-content/uploads/191209_IMP_Impact-of-

【ツール使用の流れ】

まずはデータの収集を行う。データ収集の対象は、図▲に示す 15 のカテゴリであり、各データカテゴリについて指標(indicator)、ローデータ(data)、データの情報源(source)、そのデータに基づく評価結果(assessment)の 4 種類の情報を揃えることが推奨されている。

インパクトの側面	データカテゴリ	定義
WHAT (何を)	アウトカムの水準	<ul style="list-style-type: none"> 企業へのエンゲージメントでステークホルダーが享受したアウトカムの水準。アウトカムには、ポジティブ/ネガティブ、意図した/意図していないものがある。
	アウトカムの閾値	<ul style="list-style-type: none"> ステークホルダーが「ポジティブなアウトカム」だと考えるアウトカムの水準。この閾値を下回ったものは全てネガティブなアウトカムとみなされる。国内あるいは国際的に合意された基準でもよい。
	ステークホルダーにとってのアウトカムの重要性	<ul style="list-style-type: none"> 享受したアウトカムの重要性に関するステークホルダーの見解。可能であれば、アウトカムを享受した人々が提供したデータがよいが、第三者機関による調査も考慮してよい。環境の場合は、科学的調査の見解がこれに該当。
	SDGターゲットもしくは他のグローバル目標	<ul style="list-style-type: none"> アウトカムと関連のあるSDGターゲットやその他のグローバル目標。アウトカムが複数の目標に関連している可能性有り。
WHO (誰が)	ステークホルダー	<ul style="list-style-type: none"> アウトカムを享受するステークホルダーの種類。
	地理的境界	<ul style="list-style-type: none"> ステークホルダーが社会・環境面のアウトカムを享受する場所。
	ベースラインとなるアウトカムの水準	<ul style="list-style-type: none"> 企業へのエンゲージメント以前にステークホルダーが享受した、あるいは企業による影響を受ける前のアウトカムの水準。
	ステークホルダーの特性	<ul style="list-style-type: none"> ステークホルダーの社会・人口学的特性や行動特性、生態系の特徴。
HOW MUCH (どの程度)	規模	<ul style="list-style-type: none"> アウトカムを享受する人の数。地球環境の場合は、本カテゴリは関係しない。
	深さ	<ul style="list-style-type: none"> ステークホルダーが享受する変化の程度。深さは、「アウトカムの水準」と「ベースラインとなるアウトカムの水準」の間に生じた変化を分析することによって計算される。
	期間	<ul style="list-style-type: none"> ステークホルダーがアウトカムを享受する時期。
CONTRIBUTION (企業の寄与度合い)	事実に反する深さ	<ul style="list-style-type: none"> 企業へのエンゲージメントや企業による影響がなくても、いずれにせよ起こったであろう変化の推定程度。同業他社の実績、産業または現地のベンチマーク、ステークホルダーのフィードバックは、ステークホルダーで起こりそうな変化の程度を推定するために使用できる反事実の例である。
	事実に反する期間	<ul style="list-style-type: none"> 企業へのエンゲージメント年とや企業による影響がなくても、アウトカムがいずれにせよ持続したであろうと推定される期間。同業他社の実績、産業または現地のベンチマーク、ステークホルダーのフィードバックは、ステークホルダーで起こりそうな変化の程度を推定するために使用できる反事実の例である。
RISK (リスク)	リスクの種類	<ul style="list-style-type: none"> 人や地球への期待されるインパクトの提供を損なう可能性のあるリスクの種類。
	リスクレベル	<ul style="list-style-type: none"> リスクのレベル。リスクが発生する可能性と、人や地球に及ぼす影響の深刻さを組み合わせて評価する。

図▲ インパクトの 5 側面と 15 のデータカテゴリ

出所：Impact Management Project「Impact Data Categories Template」を基に CSR D作成。

上記データが揃ったら、個々のインパクトについて、図◆の表中の A、B、C のインパクト区分を用いて分類し、さらに企業の総合的なインパクトを A、B、C で判定する（詳細は本文 p. 13～p. 14 参照）。なお、情報が不十分な側面がある場合は、その企業は「害を及ぼす可能性あり (May Cause Harm)」とする。

インパクト区分	定義
害の可能性あり (May cause harm)	—
有害である (Does cause harm)	—
害の回避 (A ct to avoid harm)	<ul style="list-style-type: none"> 企業は、人々や地球にとって重要でネガティブなアウトカムへの影響を低減あるいは防止する
ステークホルダーへの恩恵 (B enefit stakeholders)	<ul style="list-style-type: none"> 企業は、害を回避するだけでなく、人々や地球にポジティブなアウトカムに対しても様々なインパクトを創出する
課題解決への貢献 (C ontribute to solutions)	<ul style="list-style-type: none"> 企業は、害を回避するだけでなく、十分な行政サービスを受けていない人々や地球にポジティブなアウトカムに対して1つ以上の重大なインパクトを創出する

図◆ IMP のインパクト区分

出所：Impact Management Project(2018). A Guide to Classifying the Impact of an Investment, p.5 より CSRD 作成.

以上の方法で個社のインパクトの分析・測定結果が完成する。このような方法で個社のインパクトを分析・測定した結果は、複数企業のインパクト及びパフォーマンスの比較・評価を行う際に活用することもできる。例えば、ネパールで公共サービスが十分利用できていないコミュニティ（who）の貧困解消（what）という課題に対して、どの企業が最も大きな変化をもたらすことができるか、あるいはより多くの人々にインパクトを与えられるかを確認したい場合、図■のような形で比較し、投融資の検討材料等にすることができる。

インパクトの側面	データカテゴリー	企業 1	企業 2	企業 3
WHAT (何を)	アウトカムの水準	一般家庭の貧困解消	従業員の適切な収入の確保	マイクロビジネスのキャッシュローンの利用機会向上
	アウトカムの閾値	国際貧困ラインを上回る適切な世帯収入	政府機関が定める生活賃金	キャッシュローンへの適切なアクセス
	ステークホルダーにとってのアウトカムの重要性	非常に重要	重要	やや重要
	SDGターゲットもしくは他のグローバル目標	SDG1.2	SDG8.5	SDG1.4
WHO (誰が)	ステークホルダー	一般家庭	従業員	起業家
	地理的境界	ネパール	ネパール	ネパール
	ベースラインとなるアウトカムの水準	十分な公共サービスを受けていない	十分な公共サービスを受けている	十分な公共サービスを受けていない
	ステークホルダーの特性	ネパール西部地域	カトマンズ（首都）	ネパール西部地域
HOW MUCH (どの程度)	規模	10世帯	従業員2,300人	マイクロビジネス50社
	深さ	高度のポジティブな変化	最低限のポジティブな変化	最低限のポジティブな変化
	期間	データなし	14ヵ月	3年
CONTRIBUTION (企業の寄与度合い)	事実に反する深さ	これまでより良好	これまでと同程度	これまでより良好
	事実に反する期間	データなし	これまでと同程度	これまでより良好
RISK (リスク)	リスクの種類	エビデンスがとれないリスクが高い	様々	様々
	リスクレベル	エビデンスがとれないリスクが高い	様々	様々

図■ 複数企業のインパクト及びパフォーマンスの比較

出所：出所：Impact Management Project ホームページ⁸

以上

⁸ <https://impactmanagementproject.com/impact-management/how-enterprises-manage-impact/>

GIINの「IRIS+」の活用方法

GIINはインパクトの測定・管理を行うためのオンラインツール「IRIS+」を提供している。このツールは、投融資を通じて発現を目座すインパクトのカテゴリー（GIINによる定義）、あるいは解決に寄与しようとするSDGsを選択し、その戦略を順番に選択していくことで、測定・管理を推奨する評価指標を自動的に提示するものである。表示される指標はIMPによる「インパクトの5側面」に沿ったもののほか、インパクトを「どのように」実現するかのプロセスを測定する管理指標、追加的評価指標も同時に提示され、ユーザーは自由に評価指標を選択し、用いることができるようになっている。ただし、発現を目指すインパクトのカテゴリー、その戦略はIRIS+にプレセットされたものしか選択できず、この分類に沿わない案件の場合は、別途ユーザーで検討を行う必要があることに注意が必要である。

【ツール使用の流れ】

発現を目指すインパクトのカテゴリーないしは解決に寄与しようとするSDGsを選択する。ここでは特に関連するもの1つしか選択できない。下記図表ではインパクトのカテゴリーを選択した。

Select the impact priorities for this profile

First, select the Sustainable Development Goals (SDGs) and/or the Impact Categories.
Next, further specify the Investment Themes and Strategic Goals that best match your approach.
Now your priorities are complete. Click Save & View Results.

Do you want to start by SDG or by Impact Category?

SDGs

Impact Categories

The Sustainable Development Goals (SDGs) are the United Nations blueprint to achieve a better and more sustainable future for all. They address the global challenges we face, including those related to poverty, inequality, climate, environmental degradation, prosperity, and peace and justice.

IRIS+ Impact Categories are aligned with the industry classes standardized by the International Standard Industrial Classification of All Economic Activities (ISIC) and based on input received from the hundreds of stakeholders around the world involved in the development of IRIS+.

Which Impact Category best describes your area of focus?



【図●-● インパクトのカテゴリの入力】

続いてインパクトの下記の例では「エネルギー」のインパクト・カテゴリのうち、「エネルギーへのアクセス」を重視するテーマとして選び、「小規模エネルギー源における有害廃棄物の削減」を戦略として選んだ状態である。

Which Impact Theme aligns with your impact priorities?

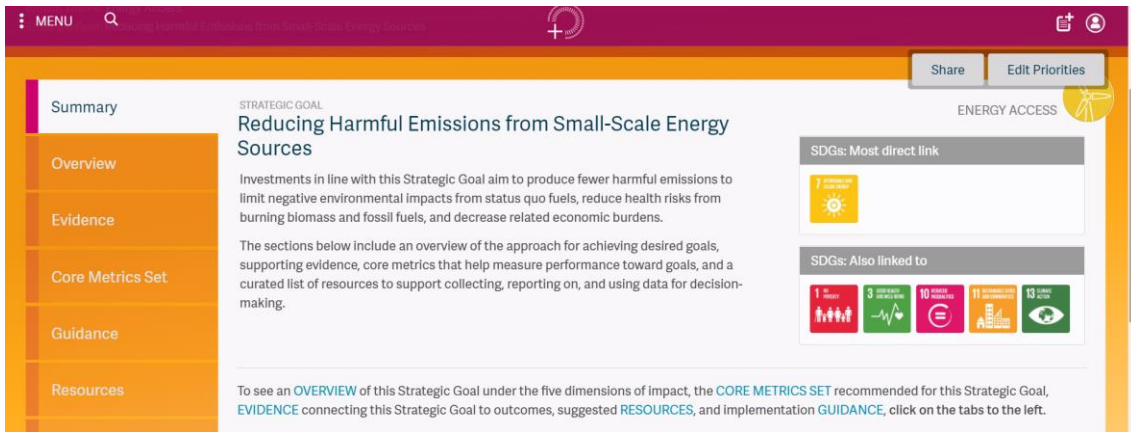
Energy Access

Which Strategic Goal(s) best matches your approach?

- Improving Energy Alternatives for Cooking
- Improving Energy Alternatives for Healthcare
- Improving Energy for Connectivity
- Improving Lighting for Business
- Improving Lighting for Homes
- Reducing Harmful Emissions from Small-Scale Energy Sources

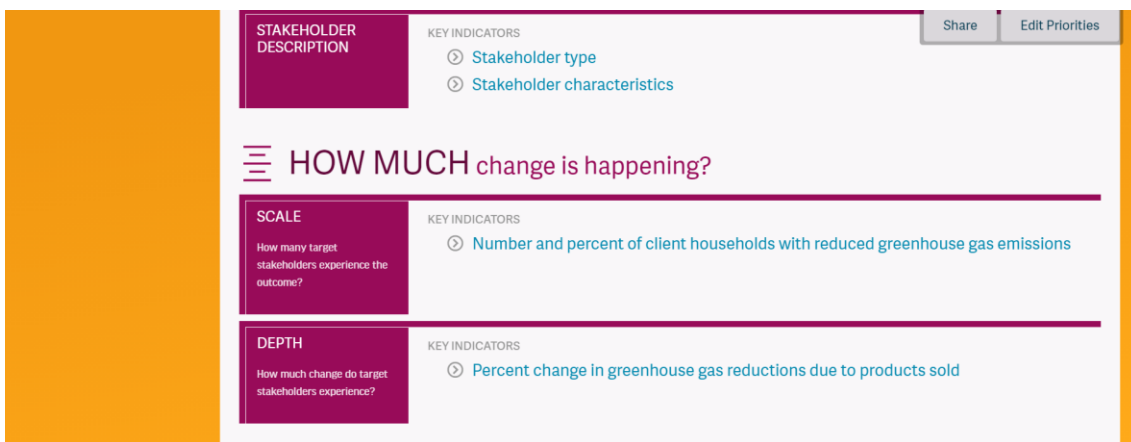
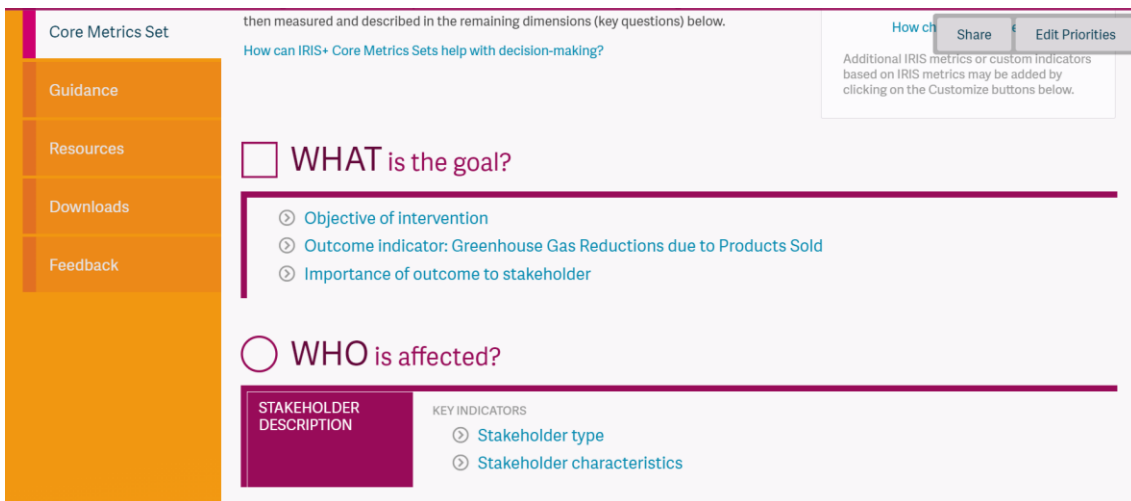
【図●-● インパクトテーマと戦略の選択】

自動的に対応する SDGs と指標等が表示される。下記はアウトプットに関するホーム画面である。



【図●-● アウトプット画面】

IRIS+によって使用が推奨された評価指標は「Core Metrics Set」のタブで確認できる。例として下記図表の中では「How Much」の指標のなかで広がり（Scale）と深さ（Depth）の指標としてそれぞれ対象世帯の数や比率、GHG 排出削減率が挙げられていることが分かる。



⊕ HOW is change happening?

CLIENT HOUSEHOLDS DETAIL	KEY INDICATORS ② Client households provided new access to products or services
PRODUCT DETAIL	KEY INDICATORS ② Number and type of products sold ② Energy savings of product compared to product replaced
CLIENT SUPPORT AND FEEDBACK	KEY INDICATORS ② Client engagement ② Client support and feedback

⊕ Additional Metrics

HIGH-LEVEL UNDERSTANDING OF OTHER EFFECTS <small>(including for other stakeholder groups)</small>	KEY INDICATORS ② Client household detail ② Client individual detail ② Savings from using product instead of similar products ② Client spending on energy ② Price of product sold ② Price of product replaced ② Cost transparency ② Client protection policy ② Quality assurance mechanisms ② Client satisfaction ratio ② Percent of client organizations provided new access to products or services ② Hours of light available from product sold
--	---

↑

【図●-● IRIS+によって使用が推奨された評価指標の一覧】

以上

免責事項

本ガイドには法的拘束力はなく、ある行為等が、本ガイドに記載された事項（「べきである」と表記した項目を含む。）に準拠しなかったことをもって、本ガイドに基づき法令上の罰則等が課されるものではありません（ただし、その行為等が他の法令等に抵触する場合には、当然、当該法令等に基づき罰則等が課される場合があるので留意が必要です。）。

本ガイドの内容については、インパクトファイナンスの実施状況を踏まえ、必要に応じ見直しを行います。

本ガイドは、個別の金融商品に係る投資判断や財務に関する助言を構成するものではなく、また、個別の金融商品の取得、売却、保有等を推奨するものではありません。

本ガイドは、個別のインパクトファイナンスにより調達された資金の充当対象事業による環境改善効果等を証明するものではなく、当該効果等について責任を負うものではありません。個別のインパクトファイナンスを行う者は、その責任の下で行うものとします。

環境省は、本ガイドに記載された情報の利用等、又は、本ガイドラインの変更、廃止等に起因し、又は関連して発生する全ての損害、損失又は費用について、いかなる者に対しても何らの責任を負うものではありません。